Х. Еґава,
Київський національний університет
імені Тараса Шевченка

日本語教育を受けた生徒たちへの大学進学に関するアンケート調査
(Результати анкетування серед учнів, що вивчають японську мову, щодо вступу до ВНЗ)

Після набуття незалежності Україною в системі початкової та середньої освіти було впроваджено вивчення японської мови. Таким чином, значна кількість школярів закінчують школу, отримавши знання з японської мови. Однак, більшість цих випускників не продовжують навчання в університеті зі спеціалізацією «Японська мова». За сприянням Київської гімназії східних мов №1 було проведено анкетування серед учнів 9-11 класів та проаналізовано результати. За анкетними даними встановлено розбіжність у виборі спеціалізації та нестача інформації для учнів. Розглядається можливість плавного переходу із середнього навчального закладу до вищого.

Ключові слова: *артикуляція, розбіжність, варіанти вибору, нереалізоване прагнення*

После обретения Украиной статуса независимого государства, в системе начальной и средней школы было введено изучение японского языка. Таким образом, значительная часть учеников оканчивают школу, получив определенные знания по японскому языку. Однако большая часть этих выпускников не продолжают обучение в университете по специальности «Японский язык». При содействии Киевской гимназии восточных языков №1 было проведено анкетирование среди учеников 9-11 классов, результаты которого были проанализированы. Согласно анкетным данным, установлено различие в выборе специальности и нехватка информации для учеников. Рассматривается возможность плавного перехода из среднего учебного заведения в ВУЗ.

Ключевые слова: *артикуляция, несовпадение, варианты выбора, нереализованное желание*

Since Ukraine gained independence, Japanese language learning was introduced into practice in primary and secondary school systems. Thereby, considerable numbers of students graduate with knowledge of the Japanese language. However, the majority of those graduates do not continue their studies of the Japanese language in the university. The results of the questionnaire survey, which was conducted among students from grades 9-11 with the assistance of the Kyiv Gymnasium of Oriental Languages №1, were analyzed. Survey showed a divergence in choosing the specialty and the information deficit for students. This is a discussion of the gradual transition from secondary school to institutions of higher education.

Key words: *articulation, divergence, choice set, unfulfilled aspiration*

１．研究動機

初中等と高等教育の連携なり継続性は、各国それぞれに問題を抱えているのは、周知のことである。人間は各発達段階に合わせ学び、それに合わせて初級、中級、高等教育という現在われわれが慣れ親しんでいる教育の流れが出来上がってきた。しかし、それぞれの教育機関が、他の段階の教育機関と形式的、機械的に隔離してしまうことは、教育の一貫性や学習の相互効果の観点からも好ましいものではない。

第二言語習得としての日本語教育においても、近年、このアーティキュレーションの問題は、注目を集めている。米国、オーストラリアなど高等教育以外にも多くの日本語学習者を持つ国々では、特にこの問題が注目され2010年7月31日と8月1日に行われた世界日本語教育大会でも多くの発表が行われた。［當作2010, 世界日本語教育大会2010］また日本人自身にも帰国子女教育とその進学の問題は、深刻な社会問題ともなっている。

一方、独立後、ウクライナの初中等教育においても日本語教育が始まり、相当数の生徒たちが日本語教育を受け卒業している。しかしこれら卒業生たちの多くは大学の日本語専門学科へ進学していない。タラス・シェフチェンコ記念キエフ国立大学（以下、キエフ大学）においても、入学してくる学生の多くは、日本語に接するのは初めてであり、初中等教育などで日本語を学んだ者は、例外的でさえある。大学で勤務する受け入れ側の教師として、その現実と理由を客観的に知る必要があるであろう。

２．先行研究

比較的新しいウクライナの日本語教育事情については、内村、ゴルノフスカ、三森などが報告している。［内村2009, ゴルノフスカ2010, 三森2011］また大西は、大学生の日本語学習動機についてアンケート調査と研究を行っている。［大西2010, 2011］しかし、その多くはこれらの筆者が勤務したり調査した大学等の情報や研究であり、初中等教育の事情を詳しく報告するものはまだない。中等教育機関においては、学校の進路指導のため、教務担当者や青少年心理学担当ケースワーカーなどによる調査が行われてはいるが、日本語教育の継続性や整合性を目的とした調査は行われてこなかった。これは、今までこの問題が重要視されなかったこと、あるいは各教育機関が各自の日本語教育のレベルを上げるために精一杯であったことなどが考えられる。

３．本稿の目的

中等教育で日本語を学んでいる生徒から得られたアンケート調査、観察などをもとに、一見、単純と思われるが複雑な要素を持つ「なぜ、日本語を学習した生徒たちは、大学で日本語を続けないのか？」ということについて考察したい。

４．調査方法

教育実習の機会を利用し、キエフ第一東洋語ギムナジウム校 (Київська гімназія східних мов №1, 03115, м. Київ, Львівська вул., 25) の協力を得て、9年生から11年生にアンケート調査を行った。現在同校はキエフ市立の学校であり、入学に

際しての経済的な制約などは基本的にない。児童生徒は1年生から11年生まで、入学時の希望によって選択した中国語やトルコ語など多様な東洋言語や英語やイタリア語など西洋語も学習している。

日本語調査は2012年2月20日と21日に、キエフ大学から訪れた教育実習生の授業の間の休憩時間を利用した。最終学年である11年生は、進学や就職など進路決定をしなければならない時期であり、10年生の生徒もほぼ一年後に近づいている進路決定について、何がしかの考えを持つ時期でもある。9年生はまだ明確な進路や将来のことについて具体的行動をとるわけではないが、当然関心が表れる時期でもある。

アンケート調査には11年生13名（うち男子7名、女子6名）、10年生７名（うち男子3名、女子4名）、9年生4名（うち男子2名、女子2名）、合計24名が参加した。

調査を行うに当たって生徒たちには主な調査目的や背景事情を知らせなかった。大まかに「今後の日本語教育のため」と言う説明をして協力を得た。また、事前に予定されていたキエフ大学の入学案内行事も22日行われ、アンケートを行う側からの予備知識の植付けを極力避けた。アンケート実施時間はおよそ5分から10分までとして、生徒たちのストレートな考えを重視し、思索の複雑化を避けた。

アンケートはウクライナ語で、添付資料のような質問を設けた。（資料「アンケートと和訳」参照）第一問「教育実習は、私に…」は教育実習中でもあり、アンケートが自然なものであるように感じられるように、直接本研究とは関連しない質問を特別に設けた。本調査の主目的である第二問「卒業後、私は日本語を教えている大学に進学するだろうか？」は、まず選択制で日本語のある大学に進学するかを聞き、理由を手短に書いてもらうことにした。口頭で、ここで言う大学とは具体的にキエフ大学などを指さず、ウクライナにある日本語を教えている大学全般であると断った。調査前、キエフ大学やギムナジウム校の教師たちとこのテーマについて話し合った結果「いいえ」と答え進学しない者が多く、理由として「もう日本語に飽きた」「入学試験科目にないので有利に進学できない」「また初歩から習うのが、いや」などの答えが多いと予測とした。

第三問「卒業後、私は日本に興味をもつだろうか？」は、進路の問題を別として生徒たちが日本をどう捉えているか、将来関わっていきたいかということについて、肯定的あるいは否定的に捉えているかを調査した。これらの質問の形式は二人称の「あなたは」ではなく、一人称の「私は」を使い、生徒たちの自問を促す工夫をした。

５．結果と考察

第二問の結果をまとめると表1のようになる。（表1参照）対象者数が少ないために統計的な分析を行うことは避けるが、特徴的に「わからいない」と答える者が多い。特に予想外だったのは、進路決定を目の前にしているはずの11年生に、このように答える者が依然多いことがわかった。

「いいえ」と答えた理由は11年生では、具体性のある「専門学校に進学する」の他、予想された「希望しない」「いやだから」、10年生では「日本語を始めたばかりで、達成感がない」という答えがあり、一般の1年生から長年日本語

を学んできた生徒だけではなく、この学校の学習者にも学習年数が異なる場合があることが考慮されるべきである。また「英語かイタリア語に進学する。日本語は講習会に通う」という学習継続型の回答もあった。9年生では「日本語と関わらない仕事を選んだ」という早期進路決定型が見られる。これら学習継続型や早期進路決定型は、日本語に対する必要性があれば「はい」と答える潜在性があると考察される。

次に最も数の多い「わからない」理由として11年生は5名が「決めかねている」と答えており、進路決定直前まで、今まで長年学習してきた日本語学習の継続に踏み切れない。そして「いろいろな大学に願書を出したい」という選択肢を狭くしたくない心理が働いている。一方「経済学への進学を優先したい」という日本語学習は言語学、文学などに限定して考えてしまうというステレオタイプが見受けられる。高等教育機関も日本語を使った専門教育の選択肢を広げ、学習者の希望する専門教育とのミスマッチをなくす必要があるだろう。また9・10年生では「決めていない」という答えのみであり、まだ現実性を持たないということもあるが、判断のための情報不足が考えられる。

最後に、日本語教育のある大学に進学を考えている「はい」と答えた生徒たちであるが、11年生の理由は「日本語を修得して通翻訳者のレベルになりたい」という積極的な答えは、1名だけあった。「両親の希望」と受動的な答えをした者が1名あった。この学校の学習者は自分の意思より両親の意思に強く影響されて入学してくる場合があり、1年生であればむしろその方が当然と言える。進級するにしたがって日本語学習を自分の意思に変化させる場合もあるであろうが、この回答者のように両親の希望のままの場合もありうる。10年生では「日本語を続けたい」という学習継続型の回答、9年生では「私も両親も日本語を使う仕事は良い仕事だと思うから」という物質的利害を将来に求める回答もあった。

卒業後の日本全体に対する興味を調査した第三問の結果をまとめると表2のようになる。（表2参照）圧倒的多数の11年生は、卒業後も日本に興味を持ち続けると回答している。共通した理由は「発展した先進国」「独特の文化」と答えている。この中には進学に関しては否定的な答えや「わからない」と答えたものも多く、専門としてではなく個人的な興味の対象として日本を優位に位置付けている。「10年間以上、勉強した国だから」と答える者もおり幼児期から長年にわたって学んできた日本語と日本に対する執着心も感じられる。通翻訳者になるためにも進学したいと回答した女子生徒は「修得したい言語の国だから」と言語習得と文化的興味を関連付けている。進学で「経済学への進学を優先したい」と答えた男子生徒は、日本に興味を持つか「わからない」と答えている。この学習者はその理由を「実益がない」と考えている。このようにウクライナでは、日本語は実用性や経済的な有利性がないというイメージが存在することも、考慮する必要があるだろう。アンケート調査の前に予測した日本語あるいは日本に「飽きた」とする答えは1名だけであった。ただこの反応は長期における学習にもかかわらず、達成感が得られない学習者には、当然のことであろう。むしろ本アンケート調査では生徒たちの達成度や進路選択に関わらず、今後も日本に興味を持っていきたいという肯定的な意見が多かったと解釈してもいいだろう。

10年生では、日本に興味を持つという「はい」と答えた者たちの理由は、11年生とほぼ同様である。日本語のある大学へ進学したい理由として「日本

語を続けたい」という学習継続型の回答をした女子生徒は、卒業後も日本に興味を持ち「日本に行きたい」と希望している。このように漠然とではあるが興味と学習をリンクさせモチベーションを上げている学習者も見られる。しかし「日本語を始めたばかりで、達成感がない」と回答し進学に否定的だった男子生徒は、日本に対しても「興味が感じられない」と負の連鎖を起こしている。

9年生でも11・10年生とほぼ同じ理由で、卒業後も日本に対する興味を持ち続けると答えている。しかし、日本語がある高等教育機関への進学に対して肯定的に答え「私も両親も日本語を使う仕事は良い仕事だと思うから」という物質的利害の理由を述べた女子生徒が、一方では卒業後の日本への興味に対しては「日本研究は好きではない」とも答えており、実利優先のあまり、幅の狭い学習態度になってしまっている。

6．総括

当初、日本語教育のある大学へ進学しないと答える者が多いと予測としたが、本アンケート調査の結果、この時点の生徒たちは、入試直前まで進路の幅を狭めたくないなどの理由から、進学を明確に選択できないでいる。また「日本語学習は言語研究や文学のためであり、大学卒業後の職業は教師や通訳である」といった固定したイメージも影響している。学習者と大学との専門・職業教育に対するミスマッチの問題は、今後は是正する必要があるだろう。長期にわたって学習したが、ヨーロッパ言語のように十分な言語運用能力が達成できず、継続して学習することを躊躇させる「あきらめ」の心理も影響している。

当初予測した「入学試験科目にないので有利に進学できない」「また初級から習うのが、いや」などは、アンケート結果では現れず、むしろ生徒たちへの大学の入試システムや学習カリキュラムの情報不足が感じられた。

本調査は規模や対象者が数量的に少ないなど、今後の課題は残してはいるものの、中・高等教育機関の間の日本語教育の円滑なアーティキュレーションのためにウクライナで始めて行われたアンケート調査であり、この結果が将来の日本語教育のために生されれば幸いである。

長年日本語を学習し、将来の選択肢を決めなければならない時期にある生徒たちが「わからない」と答えているということは、高等教育機関にとっても反省すべきところが多い。現状では高等教育機関からの積極的な情報提供などアプローチがほとんどなされていない。将来の中等・高等教育間の円滑なアーティキュレーションを考え、日本語を学習する生徒が、自ら進んで更に大学で継続的に学習することが増えたとき、幼児から大人まで各年齢層を貫く、ウクライナの日本語学習や研究の支柱ができ、真の意味での裾野が広がっていくのではないだろうか。

資料「アンケートと和訳」

АНКЕТА

Я　　учень □　　учениця □　　9・10・11 класу

1. Педагогічна практика мені…

1-1. заважала □ дещо заважала □　　не заважала □

1-2. не було корисно □　було інколи корисно □　　було корисно □

1-3. **Чому?**_____

2. Після закінчення гімназії я буду вступати до університету, де є викладання японської мови?

ні □　　не знаю □　　так □

Чому?_____

3. Після закінчення гімназії я буду цікавитись Японією?

ні □　　не знаю □　　так □

Чому?_____

Дякую!!

アンケート（和訳）

男子 □　　女子 □　**9・10・11** 年生

1. 教育実習は、私に**…**

1-1.　邪魔になった □　　少し邪魔になった □　　邪魔にならなかった□

1-2.　役に立たなかった □　　時々、役立った □　　役立った □

1-3. それは、どうしてか？_____

2. 卒業後、私は日本語を教えている大学に進学するだろうか？

いいえ □　　わからない□　　はい □

なぜですか**?**_____

3. 卒業後、私は日本に興味をもつだろうか？

いいえ □　　わからない□　　はい □

それは、どうしてか？_____

ご協力ありがとうございました！！

表**1**「卒業後、私は日本語を教えている大学に進学するだろうか？」に対する回答

対象者		いいえ（進学しない）	わからない	はい（進学したい）
学年	性別			
11	男7名	3	3	1
	女6名	0	5	1

	計13名	3	8	2
10	男3名	1	2	0
	女4名	1	2	1
	計7名	2	4	1
9	男2名	0	2	0
	女2名	1	0	1
	計4名	1	2	1

表2「卒業後、私は日本に興味をもつだろうか？」に対する回答

対象者		いいえ（興味を持たない）	わからない	はい（興味を持つ）
学年	性別			
11	男7名	1	1	5
	女6名	0	1	5
	計13名	1	2	10
10	男3名	0	1	2
	女4名	1	1	2
	計7名	1	1	4
9	男2名	0	0	2
	女2名	0	1	1
	計4名	0	1	3

内村浩子（2002）「ウクライナにおける日本語教育」『東京外国語大学日本研究教育年報』第13号, 129-133.；　大西由美（2010）「ウクライナにおける大学生の日本語学習動機」『日本語教育』第147号, 94-107.；　大西由美（2011）「試験の結果に対する原因帰属：ウクライナにおける日本語専攻大学生を対象とした動機付け調査」// Мовні і концептуальні картини Світу. – К., 2011 - Вип.35, с.206–215.; ゴルノフスカ　オリガ（2010）「ウクライナにおける日本語事情」『第１回国際シンポジューム報告集　世界の日本語・日本語学－教育・研究の現状と課題』,東京外国語大学国際日本研究センター; 世界日本語教育大会プログラム<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~sugimura/achivement/table/2010sekai.pdf#search>（2010年2月20日-21日）; 當作靖彦（2010）「中等・高等教育における日本語教育のアーティキュレーションの達成　- 今後の支援活動・交流活動のアクション

プラン」，　カリフォルニア大学サンディエゴ校〈http://aatj.org/articulation/Tohsaku.pdf#search 〉;　三森優（2011）「笑顔が素敵な学生たちと勉強好きな教師たち」『世界の教育現場から,国際交流基金』〈http://www.jpf.go.jp/j/japanese/dispatch/voice/touou/ukraine/2011/report02.html〉

Т. Жук,
ПТНЗ «Інститут сходознавства
та міжнародних відносин «Харківський колегіум»

ОСНОВНЫЕ ЗАДАЧИ ПРОФЕССИОНАЛЬНО ОРИЕНТИРОВАННОГО ОБУЧЕНИЯ ЯПОНСКОМУ ЯЗЫКУ СТУДЕНТОВ СПЕЦИАЛЬНОСТИ «МЕЖДУНАРОДНЫЕ ОТНОШЕНИЯ»

В статті розглянуто головні завдання професійно орієнтованого навчання японської мови студентів спеціальності „Міжнародні відносини" та можливі шляхи вирішення цих завдань.
***Ключові слова**: методика навчання іноземної мови, завдання навчання, професійно орієнтоване навчання іноземних мов*

В статье рассматриваются основные задачи профессионально ориентированного обучения японскому языку студентов специальности «Международные отношения» и возможные пути решения этих задач.
***Ключевые слова**: методика обучения иностранному языку, задачи обучения, профессионально ориентированное обучение иностранным языкам*

The main learning goals and objectives of profession-oriented Japanese language teaching for students major in International Relations are being examined in the article.
***Key words**: foreign language teaching methodology, learning goals and objectives, profession-oriented foreign languages teaching*

Свободное владение иностранными языками для студентов специальности «Международные отношения» является необходимым условием успешной профессиональной деятельности в будущем. Однако специальность «Международные отношения» не относится к «языковым» специальностям, в связи с чем количество часов, отводимое на изучение иностранного языка, существенно отличается от количества часов у студентов-филологов. Также у студентов-международников отсутствуют разнообразные спецкурсы по отдельным аспектам перевода, спецкурсы, знакомящие с культурой и историей страны изучаемого языка. При этом требования, которые предъявляются к уровню владения иностранным языком студентами-международниками, значительно выше, чем требования, предъявляемые в отношении студентов